

第130回

「君といつまでも」誕生の 創作過程と歌唱作法

「バカヤロー」の絶叫台詞で一世を風靡した美樹克彦の『花はおそかった』が発売される3か月ほど前、昭和41年の大晦日、東京宝塚劇場で開催された第17回NHK紅白歌合戦で最も注目を浴びたのは、数時間前にレコード大賞を受賞した橋幸夫の『霧氷』でもなく、舟木一夫『絶唱』や西郷輝彦『星のフラメンコ』でもありませんでした。

歌手が本職でなかった加山雄三、若大将の『君といつまでも』は、(発売が前年だった等の)理不尽な理由でレコード大賞受賞はなりませんでしたが、紅白歌合戦での観客の温かい拍手が、この曲こそ昭和41年を代表する歌だ、ということを教えてくれました。ブルコメッツが『青い瞳』で初出場、長髪GSのスパイダースが落選という時代でした。

『君といつまでも』が発売される半年前の昭和40年6月、若大将自作自演による第1作『恋は紅いバラ』が発売されます。『君といつまでも』はコード進行、編曲、台詞入り構成

など、まさに『恋は紅いバラ』の2匹目のドジョウを狙ったすばらしき二番煎じでした。

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



若大将の分身・弾厚作は、おそろく昭和37年当時、日本でも人気のあったパット・ブーンの『悲しき女学生』あたりの旋律が頭の中にある、台詞入りの洋楽としては、同じくパット・ブーンの『アイル・ビー・ホーム』や憧れだったエルヴィス・プレスリーの『アー・ユー・ロンサム・トゥナイト』のことを思い浮かべていたかもしれません。

先にできあがっていたメロディーにつけられた歌詞は、岩谷時子の手によってタカラヅカ男役トップスターの独唱にふさわしいような「堂々たる愛の告白」に仕立てられます。そして、仕上げは編曲担当の森岡賢一郎の登場で、聴いている人の気持ちがいっそう高鳴るよう、当時、日本でも人気のあったカンツォーネ、『貴方にひざまづいて』『夢みる想い』『アル・ディ・ラ』などの編曲手法を応用、踊るような副旋律(いわゆる裏メロです)をストリングスで挿入して盛り上げます。

台詞入り若大将ソングには、『君といつまでも』『恋は紅いバラ』以外にも、『夜空を仰いで』『ある日渚に』(両曲共、詞・弾厚作)、『君のために』『君の瞳の蒼空』ぼくの妹に』等がありますが、若大将の台詞スタイルは、お相手に対しての呼びかけとともに、告白は硬くならないよう、語尾に「くだなあ」「くねえや」「くね」等、終助詞をつけて自然な感情を強調、最後に「いいだろ」「愛してる」などで締めます。たとえ映画の中の劇中歌だったとしても、相手役の澄ちゃんこと、星由里もきぞかし気持ちよかったことでしょうね。

あとは歌唱法ですが、青春歌謡御三家のような切羽詰った緊張感を捨て、大らかに歌うタカラヅカのトップスターのようになりきることでしよう。上手に歌おうとせず、かつての若大将のように地声を張り上げ、指で鼻の脇をこすりつつ少しの照れを意識して愛の台詞を語れば、亡き岩谷時子も「いいでしょう」と笑顔で認めてくれるはず。カラオケを楽しめる日が早く戻ってくると思います。